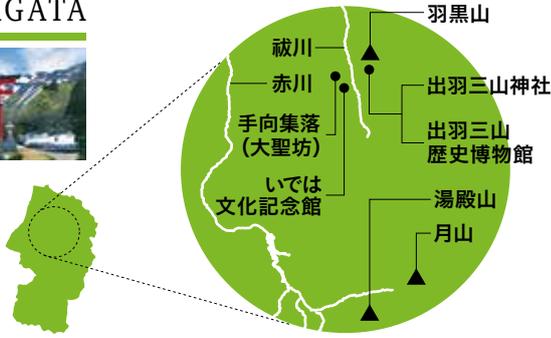


YAMAGATA



湯殿山



出羽三山 略年表

推古元(593)年	能除上人(蜂子皇子)、羽黒山と月山を開く
推古13(605)年	能除上人、湯殿山を開く
養老5(721)年	行基、羽黒山に登る
大同元(806)年	空海、酒田に来て、梵字川をさかのぼって湯殿山に到る
大同2(807)年	羽黒山本社創建
延喜14(914)年	中島岳に虚空蔵菩薩の像を造る。羽黒山伏の秘密の拝所という
延長4(926)年	羽黒山の本社を修造、翌年成就
治暦元(1065)年	源義家、羽黒山の本社を修造。2年を経て竣工する
延久元(1069)年	源義家、羽黒山本社を修復
保延元(1135)年	藤原秀衡の発願により、月山の虚空蔵岳にて峰中の護摩を行う
永治元(1141)年	山城坊永忠、羽黒山縁起を作る
承安2(1172)年	藤原秀衡、田川次郎を奉行として羽黒山の本社を修造
文治3(1187)年	源義経、兄頼朝の怒りをうけ、出羽に下り弁慶を羽黒山に代参させる
建久4(1193)年	源頼朝、奥羽平定報賽のため羽黒山本社修造、黄金堂建立
安貞2(1228)年	將軍・藤原頼経、羽黒山本社を修復
建治元(1275)年	幕府、蒙古襲来に戦勝し、報賽のため大鐘を羽黒山に寄進
正和2(1313)年	平貞時、五重塔を再建
元弘2(1332)年	月山御田原に阿弥陀如来の銅像を安置する
応永2(1395)年	大井沢の大蔵坊(後の大日寺)建つ
慶長10(1605)年	最上義光、羽黒本社を修復し翌年成就、登山参詣
慶長13(1608)年	義光、志村光安に命じ五重塔を修造
寛永16(1639)年	天宥別当、湯殿山の祭祀権を争い羽黒山と大日寺、本道寺、大日坊、注連寺の4カ寺と入会とすべき旨の判決あり
正保2(1645)年	天宥、東照宮を羽黒山上に勧請する
寛文5(1665)年	羽黒山の社領1500余石の朱印状下る
元禄2(1689)年	芭蕉来山し、月山、湯殿山に登拝
文化8(1811)年	本社、開山堂、行者堂、弁天堂、六所堂焼失。寛諄、日光山医王院より入山、別当兼執行に任じ、本社再建に着手
文政元(1818)年	本社竣工
文政6(1823)年	開山能除上人に対して照見大菩薩の称号を賜う
文政8(1825)年	開山堂建立
明治3(1870)年	羽黒権現を出羽神社と改め、別当以下に復師を命ずる
明治7(1874)年	照見大菩薩を蜂子皇子と称し、開山堂を蜂子神社と称する
明治10(1877)年	月山、湯殿山に初めて女性が参詣。男女約5000人

資料提供 / 出羽三山神社

講師：星野文紘氏



昭和21年、山形県生まれ。大学卒業後、宿坊「大聖坊」の十三代目を継承し、「秋の峰」に初入峰。平成19年、「冬の峰百日行」の松聖となった。出羽三山神社責任役員理事などを務め、各地で講演も行う。著書に『感じるままに生きなさい』（さくら舎）ほか。



深まる一冊

答えは自分の感じた中にある  
星野文紘著(家の光協会)

羽黒山伏として生きる著者が、修験道の修行から見えてきたものとは。現代を生きる人々が、すがすがしく前向きに生きるヒントが詰まった一冊。



YAMAGATA

# 山形

第3回 第1部

## “感じる知性”が導く 修験道への扉

出羽三山に生きる羽黒山伏の辻説法



2018.1.1.23(FRI) 13:00

# “感じる知性”が導く修験道への扉 出羽三山に生きる羽黒山伏の辻説法



羽黒山の石段を行く秋の峰の一行。8月下旬から7日間かけて荒行が行われる。一般参加も可能だ



## 1 修験道の極意とは 人間本来の力を開放すること

羽黒修験の宿坊・大聖坊が居を構える鶴岡市の手向集落。霊峰・出羽三山(羽黒山、月山、湯殿山)を信仰する古くからの羽黒山伏の里である。山伏とは、修験道の行者(修行者)をいう。山伏はまた、一般の里人を修験道場である山へと導く、修行のガイド役でもある。山に籠もって苦行を行い、神仏の持つ霊妙不思議なご利益を、現世に表す術を身に付ける修験道。「大自然の中に身を置き、感じたことを考える哲学」と大聖坊十三代目・星野文紘氏は説く。現代人は知識を重んじるあまり、自分自身で感じ、気付くという人間本来の力が封印されている。その“感じる知性”の封印を解くのが山伏修行であり、現代にも通じる修験の真価があるという。



死を意味する白装束が山伏の基本。煩惱を消すほら貝も身に付ける  
©2018 ヤマガタデザイン株式会社

日間にわたる厳しい修行である。毎年、手向集落から2名の長老山伏・松聖が選ばれ、50日は自宅で、50

日は山に入り祈り続ける。庄内一円の安寧と豊穰への祈願は、大みそかから元旦にかけて行われる松例祭で満願を迎えるのである。2018年1月、春の峰が150年ぶりに復活した。かつての儀礼に倣い、冬の峰で稲霊を宿した種籾を護符に入れ、檀家に配る。春になると檀家は水田に護符を立て、豊作を祈るのだ。人間の命の根源である稲。その豊穰を願う冬の峰は、春の峰によって成就するといえる。

冬の峰の100日行で五穀を納め毎朝毎夕祈りを捧げる神具「興屋聖(こうやひじり)」

## 3 新たな魂として生まれかわる 出羽三山を巡る旅

出羽三山への参詣は中世のころから盛んだった。江戸中期以降になると、信仰の旅が半ばレジャー化する中で「生まれかわりの旅」として広まっていった。最も里に近い羽黒山は、現世利益をかなえる山。主峰の月山は死者の魂が集まる極楽浄土



出羽三山で最も標高が高い月山。山頂からは広大な庄内平野を見渡すことができる

で、過去の世を表す。そして、すべてを生み出す山の神を祀る湯殿山は、未来の世を表すとされる。三山を巡ることは、現世の穢れを落とし、生きる力を新たによみがえらせる死と再生の旅と考えられた。三山を巡る上で大切なのは、無心に祈りを捧げることだ。祈りは、自然の至る所に宿る生命や、目に見えぬ存在をそのまま受け入れる行為。何事も頭で決めるのではなく、山で感じ、気付いたことを信じる。修験の世界に踏み入る三山巡りは、現代を生きる力をもたらす旅なのである。

## 2 庄内一帯の豊穰を願い 稲霊の出現を祈る冬の峰

古来、羽黒修験には四季の峰という季節ごとの修行があった。しかし明治時代の神仏分離によって、山上だけで行われていた春の峰は廃絶してしまう。一口に修行といっても、意味や内容は春夏秋冬いずれも異なる。例えば秋の峰は、仏教(密教)に由来する十界行を行うが、これは山伏を養成する修行。かつては山伏の資格を得る厳格な修行であった。また最も重要とされるのが、9月下旬に始まる冬の峰。五穀に稲霊が宿るのを祈る、100

稲霊を込めた種籾は護符に入れ、ネコヤナギの枝に付けて頒布する

